年に一度の楽しみ

弁護士　加守田　枝里

1　はじめに

私は、中学時代に京都に引っ越してきました。その年から毎年欠かさず祇園祭に行っています。といっても、学生時代のほとんどは、たこやきや焼鳥といった屋台の食べ物を目当てに人混みの中を歩き回っていました。しかし、ここ数年は、山鉾巡行や曳初めを楽しみにするようになりました。きっかけは、働き始めたら平日にお祭りを見に行けなくなるだろうから、そうなる前に見ておこうと考えたためでした。ところが、いつの間にか山や鉾に親しみを持っていたことに気付かされ、夢中になって見入るようになりました。そこで、ファンの一人として、私が注目している山鉾をいくつかご紹介したいと思います。

2　大船鉾

ご存知の通り、大船鉾は、一昨年150年ぶりに復活しました。大船鉾は、幕末の蛤御門の変で船形本体や車輪、龍頭などを焼失し、巡行に参加できなくなりました。設計図等の資料がほとんど残っていなかったため、復活に際しては、消失する前の姿を描いた古い絵や消失せずに残っていた水引の長さから、鉾の形や大きさを割り出し設計されたそうです。また、菊水鉾保存会から石持、車輪、車軸、黒主山保存会から欄縁、三若神輿会から音頭取り力綱などが寄蔵され、岩戸山の囃子方からお囃しの指導を受けるなど、他の山鉾からの協力もあったそうです。

復活後初の巡行では、大きくどっしりとした大船鉾が吹き流しをなびかせて最後尾を進んでくる姿が、まるで航海を終えて戻ってくる船のように堂々として迫力がありました。何より、大船鉾が近づいてくると自然と拍手が起こる様子、巡行を終えて鉾町に戻ってくるのをたくさんの人が迎える様子は、復活を心待ちにしていたという人々の気持ちがひしひしと伝わり、大変感動的でした。

3　綾傘鉾

綾傘鉾は、台車の上に大きな傘を載せた傘鉾の形態をとる鉾です。傘鉾は、現在33基ある山鉾の中でも綾傘鉾を含めて2基のみですが、今日の山鉾の形態が完成する以前の古い形です。応仁の乱以前の15世紀前半の記録にも綾傘鉾が登場することから、550年以上前から存在した古い鉾であるとわかるそうです。綾傘鉾の見どころのひとつは、棒振り囃しです。踊りのある囃しを持つのは、2基の傘鉾だけです。棒振り囃しは、鉦、太鼓、笛の楽団演奏に、赤熊のかぶり面をつけた棒振りと鬼面をつけた巡柱（太鼓持ちと太鼓打ち）による踊りが付随するものです。この棒振り囃しは、巡行の間の複数の箇所で止まって行われ、また宵山でも披露されます。緩急のある演奏と太鼓の拍子に合わせて、踊りがどんどん速くなり、棒が手を離れて飛んでいってしまうのではないかとひやひやしますが、見事に踊りきる姿は迫力満点です。

4　鷹山・布袋山

ここまでご紹介した大船鉾・綾傘鉾は、いずれも一旦巡行から姿を消し、その後多くの人々の苦労と努力によって復活したという歴史があります。現在、これらの他にも鷹山と布袋山という休み山が存在します。

鷹山は、1826年の大雨で懸装品を損傷して以降、巡行に参加しなくなりました。そして、巡行不参加から200年の節目となる2026年までの復活を目指し、昨年約190年ぶりに祇園囃しを演奏しました。3体の御神体のうちの1体である「犬飼い」が犬を連れているところが可愛らしいという点も印象的です。

布袋山は1788年の大火によって消失し、巡行に参加しなくなりました。山の形態は定かではないものの、「祇園祭礼巡行図巻」には被り物で行列に参加している様子が描かれているそうです。巡行に復帰した際にはどのような形態になるのか楽しみです。

5　おわりに

私が年々祇園祭に惹かれるのは、それぞれの山鉾を守り、祭を支えていこうとする人々の思いに魅了されているからではないかと思います。一旦巡行から姿を消した山鉾を復活させようと長い年月をかけて活動される方々、お囃しや踊りを守り伝えるために一年を通して練習を重ねている方々、祇園祭に携わる方々を見ていると、こういった方々によって、伝統が守られ、時に歴史が動かされてきたのだろうと感じさせられます。今後も、山鉾巡行のみならずこれまで見ていない行事・祭事を見に足を運び、祇園祭そして京都の魅力をたくさん知っていきたいと思います。